

紹介

安田 健著『江戸諸国産物帳―丹羽正伯の人と仕事―』

江戸時代中期、將軍吉宗と幕府は、国内物産開発を奨励する殖産興業政策を打ち出した。幕府はそのための技術者として、本草家たちを登用した。阿部将翁、丹羽正伯、野呂元丈たちである。

幕府の政策は、薬園の設立と薬草を中心とした有用植物の栽培、採薬使による調査や採薬、和薬(国産薬)検査機関「和薬改会所」の設立と流通機構の確立、諸国天産物の全国的調査などであり、登用された本草家、民間の本草家がそのために活躍した。

享保十九年、「諸国江産物お尋ね」という『産物帳』作成の命令が発せられた。全国の諸領では、翌年から元文三年ごろにかけて、『産物帳』が作られ提出されたと思われる。『産物帳』は、本帳、絵図帳、註書からなる。これらは、正伯のもとに集められたが、現存していない。

著者は、昭和二十五年以来、各地に残された控えの『産物帳』の探索をしてこられた。現存の『産物帳』は、盛永俊太郎・安田健編『享保元文諸国産物帳集成』全二六巻(科学書院刊)として、復刻出版がなされつつある。このための調査研究事業は、故盛永氏と著者が営々とおこなってきたものである。

本書は、『産物帳』の紹介と、『産物帳』から見た当時の動植物、丹羽正伯の生涯が中心となる。目次を紹介する。

一 『産物帳』とは何か

二 『産物帳』のなりたち

三 埋もれた『産物帳』を求めて

四 諸国の『産物帳』から二五〇年前を見る 一七三〇年代の

トキの分布、一七三〇年代のカワウソの分布、一七三〇年代のオオカミの分布、『産物帳』絵図に見られる動植物

五 丹羽正伯の生涯

さらに、著者と上野益三氏の「解説対談」、資料として所在が

確認された『産物帳』一覧、巻末に「丹羽正伯年譜」、巻頭には、八頁からなる絵図のカラー図版を載せている。

正伯は、『庶物類纂』を編纂した本草家稻生若水の弟子である。

本書によれば、吉宗から『庶物類纂』後篇の増修を命ぜられた正伯は、増修のためという名目で、必要範囲を越えた天産物の全国調査を行なったとしている。しかし「対談」では、上野氏が吉宗の意向があつたからできたのであろうと述べている。

なにはともあれ、このような全国調査は江戸時代これ限りであり、本草学、とくに博物学史上有意義であり、現存『産物帳』は貴重な学問的資料である。現在判明した『産物帳』と関係文書は約一七〇点で、失なわれたものの約三割程度と推定される。

著者も望む、未発見資料の発掘への協力、復刻本も刊行されつつある状況での各方面からの検討が期待される。

(矢部 一郎)

「晶文社 一九八七年七月 A五判 一三九頁

一、九〇〇円」

本書は「ナポレオン伝」の翻訳や、渡辺華山・高野長英等に知的影響を与え、彼等の下獄とともに自殺した蘭学者小関三英の伝記である。著者は藍生会不動ヶ丘病院長半谷二郎氏で、三英を思想家という視点から論求し、昭和五十九年六月十六日（三一三八号）より『日本医事新報』に二三回にわたって連載した論文を一冊にまとめて出版されたのである。

著者は執筆にあたり、三英の足跡を尋ね郷土史家を訪れ、多くの資料を読んだという。それは本書によると、三英が「最後には、周辺にある自分の足跡を可能な限り消し去って自殺した。残された家族も、彼の遺志に従って多くの文書を火中にした」からであろう。そしてわずかに残された彼の書翰や翻訳書、彼の友人池田玄斎の「弘采録」「病問雑抄」、華山の「全棗堂日録」等の資料を調査、再吟味して思想家三英を描き出そうとしたのである。そのため本書は、資料に基づき、できるだけ資料を提示して論を進めている。このことが本書の特徴になっているように思われる。本書は第一部「三英考」、第二部「三英伝」、付録「ナポレオン伝」、資料篇から成っている。

第一部「三英考」は、彼の学識が卓越していたために生まれた誤伝の修正に力点が置かれている。馬場佐十郎への従学、小石元瑞との逸話、長崎遊学とシーボルトへの従学、「ナポレオン伝」翻訳着手の時期等々に関することである。こうした誤伝修正と

もに、『ナポレオン伝』『厚生新編』等の翻訳を通して得た彼の思想や、大塩平八郎の乱に対する彼の見方をもとに政治意識について新たな解釈を加え、気象と農作物、庶民生活を見つめる彼の目にも論が及んでいる。当時の蘭学者の政治・社会に対する意識・認識が窺われて興味深い。

第二部「三英伝」は、彼の一生を一三章に構成し、彼を通した庄内・仙台地方における蘭学の受容・普及、「ナポレオン伝」外の翻訳によるフランス革命の理解とそれに伴って形成した彼の思想、華山・長英等への思想的影響等々、思想家としての彼の人間像を論求している。そしてフランス革命の意味を理解した彼は、「アンシャン・レジームの崩壊という状況が、フランス革命を結果したと考えれば、幕藩封建体制の内部からの崩壊が、革命を招来するわけであり、三英の今後の課題は、そのときこそ革命の指導者として如何に対処していくか」というところに至ったとしている。付録の「ナポレオン伝」は、その意味で読者の理解を促す好資料の一つとなっている。

近年、渡辺華山手沢本の三英訳による、西洋の学問を分類・説明し、学校制度にも言及すると共に、序文には社会契約説とこれに基づく憲法の制定にも触れている「鑄人書」（佐藤昌介解題『洋学者稿本集』所収 八木書店 昭和六十一年刊）も刊行された。本書と併読することで、彼の思想やその形成に及ぼした蘭書、西洋の学問研究の範囲等、思想家としての三英像をより明らかにできるように思われる。また本書に引用された三英書翰の多くは、宗田一氏のご教示によれば、武田科学振興財団杏雨書屋に所蔵さ

れているということである。

新刊『小関三英』の刊行を契機に、三英関係史料の発掘・再検討が進められ、彼に関する研究が一層旺んになることを期待したい。

(長谷川一夫)

〔旺史社 一九八七年七月発行 B 六版
三四五ページ 二、八〇〇円〕

A・P・ウォーターソン、L・ウィルキンソン共著

川出由己・松山東平・松山雅子共訳

『見えない病原体を追って—ウイルス学史序論—』

A.P. Waterson and L. Wilkinson 著 “An Introduction to

the History of Virology” (Cambridge University Press 1978) の全訳である。著者A・P・ウォーターソンはロンドン大学 Royal Postgraduate Medical School のウイルス学教授および Hamner-smith 病院のウイルス学顧問である。共著者のL・ウィルキンソンはコペンハーゲン大学卒業後、植物生理学を専攻し、一九七三年以来ウォーターソンの下で歴史研究に専念している、一九七三年にノーベル化学賞を受けた Geoffrey Wilkinson である。筆頭

訳者は京都大学ウイルス研究所教授である。原著書名に対する本書の邦訳名からもわかるように訳著諸氏の豊かな語学力・文学的表現力に敬意を表したい。本書の性格上やや堅苦しいくらいはあ

るが、簡潔で濃い内容のせいかわず知らず中に引き込まれ、次のウイルス物語を知りたい欲望に駆られていく価値あるウイルス学史の入門書である。

光学的顕微鏡では見ることのできない恐ろしい人間社会の敵ウイルスが濾過性病毒として近代科学の祖上に乗ってきたのは細菌濾過器が苦心惨憺のすえに創り出された一九世紀末一〇年間のことである。

一四章からなる本書の第七章までが、多くの研究者によって古くから良く調べられてきた四種類のウイルス、すなわち天然痘、狂犬病、タバコモザイク病、家禽ベスト(トリA型インフルエンザ)のウイルスに焦点を当て、ウイルス粒子の性状・本質について研究者達が時代の変遷と共に順次「どのような概念でとらまえ」、「どのようにして未知のベールを剥いでいったか」が科学性を失うことなく物語り風に記述されている。

第八章以下では細菌ウイルス(バクテリオファージ)、植物と昆虫のウイルス、動物や人間の身近なウイルス病、腫瘍ウイルス、肝炎ウイルス、脳神経ウイルスにも言及されている。

筆者は感染性腸炎の感染発病機構の解明を専業とする医学細菌学分野の研究者であるが、研究が進めば進むほど未知の壁に悩まされる。未知の壁をぶち破る創造の嬉びこそ、研究者の冥利・学悦である。未知の頑強な壁をクリアーしてきた数多くのウイルス研究者の軌道の歴史は、ウイルス学者でない筆者にとっても、研究道からみて非常に示唆に当むものであるが故に、若きウイルス学研究者には必読の書として本書を推薦したい。

著者は序文として本書の「意図、さまざまな(科学史編纂の)流儀、目的」を記述しているが、現役の科学研究者として新たに科学史に取り組む鋭い解析力と創造性、意慾が感じられる。本書は項目索引も含めて二五五頁であるが、本会に登場する関連研究者一三九人の小伝に三六頁がさかれ、参考図書一七編、参考文献四九五編が掲載され、各参考文献の末尾にはその文献が引用されたページ数まで記入されている。しかも訳者の心使いにより、ウイルス分類図、ウイルス分類表、微生物比較一覧が要領よく解りやすく紹介されている。ウイルス専門家のみならず科学史研究家にとっても是非お推めしたい銘著・翻訳本である。

(三輪谷俊夫)

〔吉岡書店 二、五〇〇円〕

新村 拓著『日本医療社会史の研究』

本書は、副題に「古代中世の民衆生活と医療」とあるように、記紀の時代から中世末までの医療に関する諸問題を扱った論集である。その内容は、左の一二章から成っている。

第一章 悲田院と施薬院

第二章 中世社会における医師の地位

第三章 中世の民間医とその系譜

第四章 医師の開業と診療

第五章 薬種の流通と薬屋

第六章 古代医療の社会史

第七章 正暦五年の疫癘と流言現象

第八章 藤原実資の病氣とその対応行動

第九章 説話・物語世界の医療

第十章 古代中世の医薬書とその流布

第十一章 祈療の世界

第十二章 中世医療の社会史

この他、末尾には人名・事項の索引が付せられている。

あとがきによると、著者は病氣や医療を社会とのかかわりで究明しようとしてされていることがわかるが、本書は、そのような著者の問題意識を反映して、史書・日記・文学書などはもちろん、きわめて広範な史料を踏まえたものとなっている。著者が史料収集に払われた努力は、おそらく並大抵ではないであろう。こうした史料の博搜は、本書の論述を客観性に富んだものとすると同時に、読者に計りしれない便宜を提供しているといつてよい。

ただ本書の場合、章建てを一見しても明らかなように、個別研究の集成であるため、著者の問題意識が筋の通った形で展開されていない憾みが残る。歴史学の分野においても、社会史の研究が盛んになっていることを考えれば、本書に何らかの形で総説がないのは惜しまれるところであらう。

また細かい点について、すべてに検討を加える準備は持ちあわせないが、たとえば第十章二七八頁で、『後二条師通記』にみえる「本草下帙」を『本草和名』とされたのは妥当でなかろう。著者は「下帙」を「下巻」の意に解されたようであるが、帙は十卷

程度を一括したものとみるべきであり、『二中歴』巻十一参照)、やはりここは『新修本草』そのものと解すべきである。その他、二七九頁七行目、『太平御覽』は『修文殿御覽』の誤り、二八三頁五行目、『極要方』は『拯要方』とあるべきところである。また三一六頁七行目、『詞華集』は、このような書名の典籍があるわけではないから、『』は除かれねばならない。同頁十一行目、『于宝』は「干宝」、『搜神後紀は搜神後記』の誤植である。

しかし細部に問題が残るにせよ、はじめに述べたような本書の優れた点は、少しも価値を減じるものではない。読者が直接本書を手にとられて、その成果を汲みとられるよう願うものである。

(東野 治之)

〔法政大学出版局 一九八五年 A五判四〇七頁

五、八〇〇円〕

トスカ・ヘゼキール編著 北村智明・小関恒雄訳
『明治初期御雇医師夫妻の生活』

本書は副題が示すように、ヴィルヘルム・シュルツェの夫人エンマが新婚生活三年間の様子を実母に知らせた手紙を、一部ヴィルヘルム自身の書いたもの、また一部はヴィルヘルムあるいはエンマが父にあてたものを、彼らの孫娘で精神科医のトスカ・ヘゼキールが編集したものの翻訳である。

ヴィルヘルム・シュルツェ(以下シュルツェとする)は一八四〇

年ベルリンに生まれたが、生後数日にして母を失い、幼時から幸福な家庭生活を味わったことがなかった。フリードリヒ・ヴィルヘルム医学校を卒業後外科医として軍務に服した後、一八七四年十二月来日、医学校外科教師となった。七七年十月一たん帰国し、翌七八年四月エンマと結婚して七月再び来日、三年九カ月後八一年四月解任帰国した。

彼はミュルレルの後任として来日したが、軍医在任中にロンドンでリスター卿のもとで修得したりリスター防腐法を日本に伝えた。彼はまた眼科も教授した。

エンマは三年間の家庭生活をこまごま母親に知らせている。ピアノを連弾したり、互いに読書して聞かせあったり、遠くまで散歩したり、友人たち夫妻をパーティに招いたり招かれたりしている。時に「例によって退屈な食事と味気ない会話」と感想をもらしていることもある。日本人の外国人歓迎会などについて「とかくお金を大変浪費する日本人」と評してもいる。忙しい中を各地に旅行しているが、これにはシュルツェの持病の頭痛を忘れさせるためもあった。

当時日本の大衆にとって西洋人の挙動は珍らしく、じろじろ眺めたり、家をのぞいたりする者もいた。しかしそんな中であつても二人は日本に好意をもち、編者はシュルツェの言葉として「ほとんど七年に及ぶ日本で外科医師として働いた日々は彼のもつとも幸福な実り多き日々であつた。彼は日本の学生たちから外科の教師として、また優れた手腕の手術家として尊敬され慕われた」と言っている。

しかしシュルツェには何か頑固な原因不明の頭痛の持病があった。エンマもこれに心を痛め、いろいろ手をつくしているが帰国まで治癒しなかった。帰国の理由は兵役もあつたがこの持病も一因をなしていたであろう。学生のストライキを招いたことがあつたのもこの持病によつたのではないか。

シュルツェの講義内容は外科総論など出版されているが論文はほとんどない。エンマはこれについて「私の想像では自尊心のせいでしょう。論文というものは何か特別なもので、かつ、新しく画期的なものでなければならぬと考へていたのでしょう」と言っている。本書にも色盲をかなり深く研究していたらしいことが書かれているが、その過程、結果はまったくわからない。

シュルツェはドイツに帰るとまもなく、日本で生れた二人の子に洗礼を受けさせたが、自分の死には牧師を立ち合わせなかった。

本書における訳者の調査は詳細をきわめているので、注やその他によつてシュルツェだけでなく明治期お雇い外人について調べに際して教えられるところが多い。

(安井 広)

〔玄同社 一九八七年 B六判

四二二頁 三、〇〇〇円〕

朝日新聞社編『ボタニカルアートの世界』

「ボタニカルアート」を直訳すれば「植物学的美術」となるうが、もう少し説明的に訳せば「科学的な植物画」ということになる。著者の一人大場秀章氏によれば、ボタニカルアートとは「花の肖像画」であるとし、画家の目の前で生き生きと咲きほこっている植物の姿が鮮やかに、また精密に記録され、科学的な観察力と美術的な表現力を併せもつ特異な分野であるとしている。また、木村陽二郎氏は、植物を図によつてあらわす技術がボタニカルアートの始まりであるとし、ボタニー（植物学）の発達にボタニカルアートを育てたと述べている。そして、自然物としての植物は美しいものであり、これを忠実に写し描くボタニカルアートは、また美しいものとなるのだと説明する。

この本は、「ボタニカルアートの魅力」「ボタニカルアートの歴史」（木村陽二郎、大場秀章）「さまざまな意匠と未来」「日本のボタニカルアート」（木村陽二郎）「植物画を描く」の五章からなっており、それぞれに実例として貴重な植物図を多数載せていて、読者を魅了する構成になっている。

第一章と第二章は、主として西欧のボタニカルアートの紹介と、歴史的な発展、植物学者と植物画家の共同作業などが中心になっている。なかでも代表的な画家として、フランスのルドゥテとイギリスのフィッチをあげ、多くの彼等の作品が示されてい

る。そして、ルドウテと植物学者ド・カンドル、フィッチと植物学者フッカー父子との密接な関係を示し、優れた画家と有能な植物学者の共同のもとに精緻なボタニカルアートが作成されたことを教える。また、シーボルトの「フロラヤポニカ」に載せるミンシンガールの植物図も、日本の植物を紹介したもので、日本の植物を素材としたボタニカルアートの例として紹介されている。

日本人の手になるボタニカルアートとしては、第四章にまとめられている。「馬医草紙」の西阿、「草木花写生図巻」の狩野探幽、「花木真写」の近衛子楽院、「本草図譜」の岩崎灌園、「植学啓原」の宇田川榕菴らから、「小石川植物園図説」の植物図を描いた賀来飛霞、また、伊藤篤太郎や牧野富太郎などの近代に至るまでの優れた画家や植物学者達の植物図（ボタニカルアート）を示すと共に、木村陽二郎氏による、本草から博物学へ、ケンペル、ツェンベリ、シーボルトらの日本植物の研究とわが国への影響などを概観した解説がある。

この書には、約二〇〇点ほどの植物図が載せてあり、巻末に図譜解題が用意されていて出典や簡単な解説がある。

植物画に興味をもっている人達を対象として編集された図集の形になってはいるが、本草、博物学の歴史に関心をもつ人にとっても、多くの貴重なボタニカルアートを身近に観賞しながら気軽に読める入門書ともなっている。

(佐藤 達策)

〔朝日新聞社刊 昭和六十二年（一九八七）〕

B 五判変形

一三九頁 二、二〇〇円

木村陽二郎著『生物学史論集』

本書は、生物学史、主としてヨーロッパと日本の本草学博物学史を含む植物学史に関する個人論文集である。収載論文三三編は、今回書下された一編を除いて、一九五七年から一九八六年の三〇年間に学会誌・各種誌紙に発表されたものである。

著者には周知のごとくすでに『日本自然誌の成立』（一九七四）『シーボルトと日本の植物』（一九八一）『ナチュラリストの系譜』（一九八三）などがある。それぞれ名著の誉れが高く、広く愛読されているが、科学史を文学通り研究の足場として植物分類学分野で大きな業績を残されている著者の実践的な科学史観を提示・展開するという点では充分意を尽していないうらみが残っていた。本書の刊行によって、今日では古典の価値をもつ著者の過去のすぐれた代表的論文と近年の新研究の数々に近づくことができようになることは喜ばしい。

本書は、ヨーロッパ・日本・本・人のⅣ部に分かれる。Ⅰ部では、ヨーロッパにおける生物学の発展を、著者のパリ国立自然誌博物館での調査を中心に、哲学的背景を含めて史実に忠実に描く。リンネ前後の植物分類体系の歴史は、とくに、立体的ダイナミックにとらえられていて迫力と説得力がある。専門外の者にはやや高度な内容であるが、概説論文と個別論文とが適切に組み合わせてあり、通読してきわめて見通しのよい編集（分類）の妙を

得た論集である。Ⅱ以下は、ヨーロッパ生物学史の立場から、日本の本草学から植物学への発展史・図誌・人物をそれぞれ扱う。著者によってあらたに光を当てられ、解明されたところはきわめて多くいちいち紹介のゆとりがないので、ここではⅢ以下で扱う図誌・人物を挙げるにとどめる。

Ⅲ—コンラッド・ゲスナー『動物誌』、ドドネウス『本草』、フックス『植物図説』、ツェンベリ『日本動物誌』、ド・カンドルとスプレングル、シヨメル『厚生新編』、シーボルト『フロラヤポニカ』、岩崎灌園『本草図譜』、牧野富太郎『日本植物図鑑』等。

Ⅳ—ミシユル・アダンソン、ラマルク、ジャックモンとフッカー、ダーウィン、ツェンベリ、桂川甫賢、飯沼慾齋、松村任三、牧野富太郎、早田文蔵、中井猛之進（書下し）、前川文夫。

本書によって、西洋生物学の流れを学ぶことができるだけでなく、その奥行き深さがおのずと印象づけられる、著者の一貫した実践的科学史観が脈々と伝わってくる。

なお、後記—思い出すまま—は著者の略伝的な内容であり、収載論文成立の背景がよくわかる。

（遠藤 正治）

〔八坂書房 東京 一九八七年 A五判〕

四三二頁 一二、〇〇〇円〕

大谷雅彦著『北村宗龍』

滋賀県野洲町の郷土史家大谷雅彦氏が、埋もれていた近江の医聖」という副題をつけた『北村宗龍』なる一書を刊行された。大方の本会々員にとつて北村宗龍なる人物もまた著者の大谷雅彦氏も耳新しいことと思う。私も三年前、思文閣出版の応接室で大谷氏に初めてお会いした。その際、持参しておられた曲直瀬道三・玄朔からその門弟であった北村宗龍にあてた何通かの書状を拝見したときの感慨は今も忘れることはできない。どうしてこのような書翰が十数点もまとまって近江の片田舎に四〇〇年間も人目にふれないで保存されてきたのかと不思議に思ったほどであった。

北村宗龍は天文二十一年（一五五二）北村正頼の末子として近江国野洲郡（現野洲町）北村に生まれ、寛永二十一年（一六四三）没した。玄朔とほぼ同世代を生きた。京都に出て道三に医学を学び、その推挙によって毛利元康の侍医となつて広島に行き三百石を与えられたが、やがて郷里北村に帰り医学に励んだ、傍り里村紹巴に連歌の指導をうけ、永原天神連歌宗匠としても活躍した。九十二才で没した。その子宗与、その女婿宗雪と三代医学を行った。一族からは儒者北村可昌・国学者北村季吟がでている。宗雪のあと北村家は絶家したが、この三代の間の医師としてまた連歌宗匠としての交流を示す書翰・文書が、同地区に住む同族の木村盛美家にそっくり保存されている。

著者大谷雅彦氏は大谷大学史学科卒業後、高校にて教鞭をとり、現在は野蔵神社・三上神社の宮司をつとめる傍ら、野洲町文化財保護委員として町史編纂にたずさわり、とくに中世史を担当して町内の資料をくまなく調査した結果、木村家に伝わる宗龍関連の文書を発見して、これを丹念に解読して一書にまとめられたものである。

連歌に関するものは暫くおき、医術に関連する文書として一八 points の書翰があげられている。その内訳は、道三から宗龍へ一、宗龍から道三へ一、玄朔から宗龍へ四、元康から宗龍へ二、土井利勝から宗龍へ一、施薬院宗伯から宗龍へ一、佐竹義宜から道三へ一、玄鑑から弥四郎へ一、その他六点となっている。その各々について写真、翻刻原文、読み下し文、注解、解説を加えている。

その一、二を紹介すると、宗龍が預かっていた元康の子息の病状につき道三に教えを乞うたところ、道三が詳しく処方を書いて与えている。また玄朔からの書翰には、明後日から啓迪院で開講する、岡本玄治が代って講義するから明日午後に上洛するようにとの通知、また玄朔が常陸に流され佐竹氏に預けられた間の宗龍の友情に対する謝礼と、その間に医書一冊を書きあげることが出来て、この事に対し玄朔は「今度の牢入の徳と存じ候、誠に塞翁が馬にて候」と心情を吐露した手紙を書き送っている。

これらの書翰は公式の文書ではなくて、すべて師弟の間、あるいは患者との間の日常のありふれた出来事を報じており、医界の実情を知る上で貴重な資料である。著者は医学史研究の専門家でない事をこわりつつ、懇切に解説を加えている。

滋賀県野洲町は近江富士といわれる三上山の西麓に広がる肥沃な土地で、古く書紀にも登場し、とくに頼朝以来関東と京都を結ぶ交通の要路に当たっていた。従ってこの辺りの湖東や湖北地方にはまだ多くの資料が眠っていると思う。

大谷氏はさる九月十三日、道三の四八〇年祭にその一部を講演されたが、私は多くの方々がこの書を一読されることをおすすめる。

(杉立 義一)

〔滋賀県野洲郡野洲町大字三上 四〇九—二
代金二、〇〇〇円 直接著者へ申込む〕

Walter Hoffmann-Axthelm 著 本間邦則訳

『歯科の歴史』

著者の W. Hoffmann-Axthelm は Dr. med. と Dr. med. dent. の称号を持ち、歯口顎疾患の専門医・教授であり、ベルリン歴史協会の名誉会長である。一九〇八年ベルリンに生まれ、現在フライブルクに居住する。

氏はベルリンとフライブルクで医学と歯学を学び、一九五九年から東ベルリン・フンボルト大学の教授、六三年から西ベルリン自由大学の教授となり、七七年には同大学の医学研究所の所長となった。

著者に『齶蝕予防のための弗素問題に関する臨床的研究』『歯

口顎外科』『齒科医学史』『齒学百科辞典』(以上独文)がある。

本書は著者と親交のある本間邦則氏が“Die Geschichte der Zahnheilkunde”(七三年)とその英訳本(八一年)を底本として八五年に翻訳出版されたものである。

本書は全体を二部に分ち、一八世紀までを第一部とし、一九世紀以後を第二部とする。第一部は一〇章に分れ、古代オリエントから一八世紀における齒科医学の成立に至るまで時代を追って詳述され、地理的には広くヨーロッパ・アジア・アメリカ大陸の各地にわたっている。各章は、一、古代オリエント、二、インド、三、極東、四、コロンブス以前のアメリカ、五、ギリシヤ・ローマの医学、六、東西古代から残る影響、七、イスラム王国、八、ヨーロッパ中世の最盛期と後期、九、自然科学の目ざめ、十、一八世紀における齒科学の成立、となっている。

第二部は一九世紀から二〇世紀初頭の工業発展時代における齒科医学各分野の進歩を述べ、一九世紀のアメリカとヨーロッパに齒科教育機関が設立されたところをもって完結している。各章は、一一、義齒、一二、齒科保存学、一三、齒科外科学、一四、齒科矯正学、一五、研究と学説、となっている。

全体は時代的にも地理的にもバランス良く配分され、著者はドイツ人でありながらドイツに偏ることなく、医史学家としての客観的視点から編纂している。

図版が豊富なことは全体を分り易く興味あるものとして、いながら、なかでも古代から中世への流れは従来のごの本よりも理解し易く感じられる。また著者は医師であり齒科医師でもあるので、

一七・一八世紀の部分では、医史学の広い視野から齒科医学発展の基盤を明確に描出している。

原著における中国と日本の部分は、著者の依頼によって訳者が助言されたものと聞く。

本書には他書にない史実がいくつか報告されているが、その一つに、国家による齒科医師の認可制度がはじめて実施されたのは一六八五年のドイツにおいてであると述べられていることは興味深い。これはパリの外科医組合が始めた齒科医師の資格試験より一四年も早かったのである。

本書は学生の参考書としては勿論、研究者にとっても裨益するところの大きい名著で、このたび本間氏によって翻訳出版されたことは時宜を得た快挙であるといえる。

(戸出 一郎)

〔クインテッセンス出版株式会社 一九八五年

四三五頁 定価三二、〇〇〇円〕

D・ケイリン著

『チトクロムと細胞呼吸—電子伝達系確立への道—』(上)・(下)

David Keilin 博士による『チトクロムと細胞呼吸—電子伝達

系確立への道』はその表題のごとく細胞呼吸すなわち電子伝達系の研究の発展の歴史的展望とチトクロム研究分野で偉大な功績を残した著者自身の研究を中心にチトクロムの歴史的綜説としてま

とめ上げられた科学書である。現在チトクロムを中心に細胞呼吸の分野は細分化され専門化されており研究者はとかく専門バカになる傾向にあることは否定できず、このような点で本書は広い視野での研究者はもとより学生、一般の読者へも種々示唆を与えてくれる。

本書全体に流れているものは著者自身の科学者としての考え方、生き方であり、それは独断的でないむしろ謙虚な姿勢であり、チトクロムおよびその生物学的機能の研究が発展すべき方向に對して指示を与えてくれるものである。生命の生細胞の底知れぬ複雑さに挑戦する研究分野は魅力的でありその中でテトラピロール化合物であるチトクロムは重要な位置を占めている。自然界に存在する種々の金属蛋白質化合物の補欠分子族の一部を形成するテトラピロール化合物はクロロフィル、ヘモグロビン、チトクロムその他酵素の活性基の一部として光合成、分子酸素の運搬、細胞内酸化反応の触媒作用など生化学の分野において基本的な役割を果たしている。またこれらが私どもの生活のなかで目に映る緑色、血液、肉の色などの原因物質となっている事実からもチトクロムをはじめとするこれらの機能蛋白質の重要性がうかがえる。本書は、まず血液循環の生命の本質に関する考えの歴史的背景からはいじまり、燃焼の本質と生体反応の概念の変遷を主に酵素研究面より述べている。

一九二五年ケイリン博士は『動物、酵母、高等動物に共通なチトクロムについて』という論文を発表し、チトクロムの命名をするるとともにチトクロムの化学、生理活性などを確立した。本書

は、チトクロム研究および細胞呼吸に関する理論の発展に至る歴史的展望までを上巻に、そして下巻では、種々のチトクロムの物理化学的性質について著者の研究を中心に広く文献の考察を行っている。とくにチトクロムCの諸性質に関しては、アミノ酸配列に至るまで詳細に述べている。本書の中で著者は「呼吸に関するわれわれの知識の発達の跡を振り返ってみると川の流れに例えられる。その流れは曲がりくねっており、別々に流れているかと思えば次には支流が互いに合流し、また離れ互いに見えなくなる。ある場所では清く透明で他の場所では濁っている。時々その流れそのものから発生する霧にかくれて見えなくなる。今度はゆっくり流れ、突然急流になり、多数の障害物を通り過ぎ、再びゆるやかになり、ついには全部が合流してさらに直線的な流れとなる」と科学発達の見解を語っている。

しかしながらチトクロム研究の最近の進歩はめざましく、訳者である山中、奥貫博士らは「訳者あとがき」として最近の知見を文献とともに補足している。したがって本書は研究者ばかりでなく、学生や一般の人々に対しても、科学の発達がいかなる過程を経てきているものか、人間の真理を発見するための努力は一種の賭にも等しいものであるということを語りかけてくれている。

(原中瑠璃子)

〔学会出版センター 一九八七年 A五判

定価各三、〇〇〇円〕

「解剖の時間」という大層優雅な響きの言葉を標題にしたこの本はそのほとんどが図版である。内容は四章に区分されていて、それぞれにゴープルト・ビドロー、レオナルド・ダ・ヴィンチ、アンドレアス・ヴェザリウスそして河鍋曉斎の「解剖図」が主役で登場する。

第一章にビドローの「解剖図譜」の一葉が視知覚形式の対象となる。この解剖図譜はド・レーLESSが彫版した。医学史家のユアールによれば「解剖学者（ビドローを指す）はあまり精密に、充分に、完全に解剖を行わなかった。したがって画家（レーLESS）は足りない部分を自分の想像力で補うよりほかなかったのである。レーLESSが自分の才能を認めさせるためには、ビドローの著作は必要なかったとさえ言える。逆に言えばレーLESSの才能がなかったらビドローの著作は小さな反響しか得られなかったであろう」とあるほどだから、著者らの「死体にハエが止まっているのはなぜか」の問いかけは多くは画家レーLESSと向きあうことになろう。やはり芸術家の視覚が必要である。

著者らは第一章でヒトの視知覚形式と築きそうに向かいあっている。アリストクセーノスの七絃琴の演奏中に一本の絃が切れたとき、一匹の蟬が飛来してその音楽の埋合せをした故事もある。飛来した一匹のハエから展開される時間論のそれは寓意の画像学（イコノロジー）の世界である。

第二章は中世の「騎馬立ち」解剖図から説（と）きおこした西洋解剖図の歴史の中で、ダ・ヴィンチの『解剖手稿』のペレンガリオの解剖図への影響を大胆に論ずる。さらに、ヴェザリウスが『ファブリカ』で大成した解剖図譜の二〇〇年におよぶその影響を解説する。文中の五一図の「支骨全骨」の表現はカツセリ、バルトリン、ブランカルト、バレと引継がれて極東の『外科訓蒙図彙』に現れ『重訂解体新书』にも描かれる。その文政九年からさかのぼれば実に二八〇年も生きていたことになる。

著者らはこれらの模写の歴史を手際よく示している。この寓意的に鋤を支柱にした全骨図はよくよく人氣があつてボードレルの詩に「：埃まみれの河岸（かし）の露店に散らばる人体解剖図あり／見知らぬ国にこの身を置いて頑なな地を掻き起こしては血に塗（まみ）れたる跣足（はだし）の下に重き鋤（すき）を打込むべきを」（『悪の華』より）とある。

第三章は「還元主義者としてのヴェザリウス」を著者の一人養老孟司氏が全身骨格の「表現」と分解骨の「正確さ」で論ずる。氏のユニークな形態論はその著書『形を読む』（培風館）、『ヒトの見方』（筑摩書房）、『恐龍が飛んだ日』（哲学書房）などに譲ろう。今日鑄造されている解剖用語の源泉はほとんどヴェザリウスに発すると考えてよい。

人体という建造物（フォブリカ）の隅々にまで及んでいる用語の習得は解剖学者にとっても実に厄介なものである。当時として新しい言葉の一つ（OS）をとって分解骨に還元している手腕は確かだ。

終章は著者の一人布施英利氏の美学といえる、「科学と芸術と同じ土俵で論じた」試作品であろう。内容は日本版のメモント・モリといったところだ。しかし、西欧風のどぎつい生命力表現とはちがってやわらかく、ときにはユーモラスにつねに平面的図像を構築した主として江戸時代の解剖図のギャラリーである。ギャラリーであるから著者と同じ位置に立ってイコノロジーを楽しめる。

全章を通じて手書き彩色もあれば木版も銅版もある、石や木の彫刻の写真もあればデフォルメされた写真もある。いささか画面に統一がないのは致し方ない。およそ原書にすれば一抱えも二抱えもある資料をまとめ上げて視覚を脳に結びつけた図版ばかりのこの本は是非一読いや一見する価値がある。

(永井 廣)

〔哲学書房 一九八七年 二三四頁 定価三、二〇〇円〕

有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅷ』

本シリーズは昭和四十三年に第一集が出版されて以来、約二〇年の間につきつぎと八巻が世に出されている。幅ひろい分野をもつ洋学史の研究は、おおくの研究者たちの努力によっておおくの成果が生まれつつあるものの、第一集で編者の有坂隆道氏が、「それでもなお、歴史の諸分野における研究の進展に比して、基礎的研究からしてもまだまだ不十分であるといわねばならない」

と慨嘆しているその言葉は、二〇年たった現在でも残念ながらもまだ生きているといわざるをえない。そのような状況のもとにあって、有坂氏を中心とした関西の洋学研究者によって、二、三年に一冊の割で出版されている『日本洋学史の研究』は貴重な存在である。本巻でも息の長い研究をつづけているヴェテランの学者にまじって、二、三の新進の学究が登場して、新鮮な議論を展開しているのは、洋学史の発展にとってよろこぶべきことといっているであろう。

本書には九名の著者による一〇編の論文がおさめられており、そのテーマも論文の長さもさまざまである。中には本書のような論文集に収載するには、いささかなじまないものもないではないが、それぞれの著者が新しく発掘した史料によって展開している議論は、まさに読みごたえのあるものになっている。

初めの二編は地理学に関するもので、海野一隆の「ファルク地球儀伝来の波紋」は、オランダのファルク父子が製作した地球儀が、江戸時代のがくにあたえた影響を具体的に説明しており、ドベルグ美那子氏の「P・ムリエの日本地図手写本」は、幕末維新期に来日し、日本文化をフランスに紹介したムリエが手写した超大型の日本地図が、パリ国立図書館に存在するのをつきとめたことをあきらかにしている。

菅野陽氏の「画家ヘラルト・ドゥ・ライレッセと解剖学者ピドローとカウパー」は、『解体新書』に引用された解剖書の著名であるピドローとカウパー、そしてその解剖図を描いたライレッセとの関係を、ポール・デュメートル(パリ大学元医学部名譽管理

委員長)の『ヘラルト・ドゥ・ライレッセの解剖図版の好奇心をそそる運命』にもとつきながら紹介したものである。成瀬不二雄氏の「改定稿 池大雅と西洋画法」は、さきに発表した同名の論文に、新史料と新知見にもとづいて手をくわえたもので、大雅における水平視による遠近表現について論じ、大雅芸術にしめる西洋画法の要素を追究している。

宮下三郎氏の「木村兼葭堂所蔵の『マラバル本草』」は、本草学を学び、伝統的な本草学をこえて世界を視野の中におさめるにいたった兼葭堂の本草学と、彼の所有した『マラバル本草』を手掛りとして、日本の本草と蘭学の接点をさぐっている。

浅井允晶氏は第三集以来、わが国における牛痘法の伝播と普及について精力的に発表しているが、本集でも泉州界の種痘館について、地方文書を中心に研究を進めており、他の一編は大和郡山における種痘普及事業を、橋本家文書を手掛りとして谷景明の具休像にアプローチを試みた力作である(「堺の種痘館をめぐる二、三の問題」と「谷景明と幕末大和郡山における普及事業の展開」)。

古西義廣氏の「幕末における第二回オランダ留学生」では、確定されていないなかったこの留学生らの渡航の期日を、慶応三年五月中旬ごろと確定した。第一回オランダ留学生であった西周の諸著作から、西周の思想、とくに制度観の分析をとおして、明治初年の啓蒙思想を評価しようとしたのが、戸田文明氏の「西周試論」である。

編者は序文の中で、このような学術書を第八集まで刊行しえた

ことに感謝の意をあらわしているが、このような論文集を精力的に発刊した有坂氏をはじめ、著者の方々に、むしろわれわれが感謝をしなければならないというべきであろう。

(深瀬 泰旦)

〔創元社 昭和六十二年四月二十日 A五判〕

二七四頁 三、〇〇〇円〕

渡邊幸三著『本草書の研究』

漢方が現代の医療にはたす役割が増大するにつれ、中国医学の古典籍の記載を典拠として、臨床報告や研究論文に安易に引用している例が多見されるようになった。その一つに『神農本草經』がある。ところが『神農本草經』はいずれの版本も復原本であり、今のところ江戸末の森立之による復原の精度がもっとも高いことは、中国はおろか日本でも案外に知られていない。

もちろん他の『素問』『靈樞』『傷寒論』『金匱要略』とて、それらが漢代頃のまま現代に伝承された訳ではない。しかし、こと本草書に関しては、梁の『本草集注』から宋の『証類本草』に至るまで、歴代の増補・改訂が雪ダルマ式に重ねられ、中心たる古い部分ほどその影響は大きい。しかも改訂の毎にその前の書は不用となる運命のため、全体が伝わるのは最後の『証類本草』系のみである。まして最初の『本草集注』以前は手掛りとなる文献が格段に少なく、それ以前の『神農本草經』の旧態を浮び上らせる

のは並みたいていではない。

さいわい日本では古文物の保存が中国より優れていたため、江戸末の考証学派の医家らは『新修本草』『本草和名』『医心方』などの古写本を発見。それら善本古文獻を駆使して『本草集注』を復原し、この成果の上に森の『神農本草經』が復原・刊行された。ただし個々の字句を復原するための考証は複雑で、森立之の序文と考異よりその全体を窺うのは相当に困難である。

一方、二〇世紀初頭になると敦煌や中央アジアから、『本草集注』『新修本草』『食療本草』などの残簡が次々と発見された。これらは唐以前の本草を考察する上で、さらには森立之らの復原をより完璧にする上で、またとない資料であった。そしてまず、岡西為人氏が『新修本草』の復原を完成された。次はその前の『本草集注』である。渡邊氏はこれに真正面から取り組まれた。

氏は当目的のために、着実に研究を重ねられている。とりもなおさずそれは、江戸考証学者と同様の軌跡をたどることになるが、より完璧な研究を系統的に結実されていった。宮下三郎氏が本書の跋文に述べられるように、渡邊氏は本草医書の研究にあたり、まず『証類本草』『本草綱目』を書誌学的に体系化された。この成果はその後、岡西氏の大著『本草概説』に十分に取り込まれている。次いで『本草集注』の復原に進まれ、これに至る考証の過程を多くの「文献学的」研究論文にまとめ、続々と『日本東洋医学会誌』上に発表された。これらの「文献学的」研究論文シリーズは問題意識が専門的すぎるためか、当時も今も漢方界・医学界であまり評価されていないように見受けられる。しかし中

国の研究者に与えた影響はすこぶる大きい。一連の古本草を復原された尚志鈞氏、古医葉書の書誌文献学的研究をされる馬継興氏など、渡邊氏の論考を基礎とする研究業績はかえって中国に多い。渡邊氏は医学に関し、もう一分野の研究をされている。宮下氏が跋に述べられる応用研究がそれで、白眉は尙然が宋より将来の京都・清凉寺釈迦像胎内から発見された内臟模型について、研究班に参加された報告の論文二篇である、氏はこのため、古代中国の解剖といえは華陀のみが挙げられる通説に満足せず、中国解剖史を草した後に臟腑の変遷を闡明し、釈迦像内の五臓を研究された。氏の秩序だった研究方法はここにも現われている。

まさしく渡邊氏の業績はゆるぎなく、数十年を経た今も価値はいささかも減じていない。本書には氏の本草医書に関する代表的論文二〇篇が収められているが、その数篇は評者もかつて未見であった。評者が氏の論文に接したのは、岡西氏の『本草概説』に引かれた文献名より『東洋医学会誌』をめぐったのがきっかけであるが、今でもその時のショックは忘れられない。そして今、本書に接し再び当時反復して読んだ記憶が蘇った。

すでに没後二十余年とはいえ、私淑し敬愛してやまぬ渡邊幸三氏の論文が一書となったことは、評者一人の喜びではない。いみじくも宮下氏が述べられるように、森立之をはじめとする江戸医学の学者による本草学の研究は、その後岡西為人・渡邊幸三・森鹿三氏ら上方の学者により継承・発展されてきた。本書はその中であって、日本で完成された本草書の体系的研究の水準を示すものとして、斯界の更なる発展に強固な基盤を与え続けるであろう

うと確信している。

なお本書は書店にて購入できないので、左記の発行者に直接申し込むこと。

(真柳 誠)

〔武田科学振興財団杏雨書屋 大阪市淀川区十三本町二一七七八五 A五判 総五一七頁 一九八七年十一月初版〕

一〇、〇〇〇円(送料込み)

福島義一著『眼科学史の窓』

本書は『日本眼科全書』の眼科史を著わされた、日本の眼科学史の研究者として第一人者である福島義一先生が編まれた医学史の大作である。内容は先生が長年の間に収集された膨大な文献や資料をもとにまとめられたものであるが、医家以外の一般人の人が教養書として読むにも肩の凝らない形で平易に書かれている。

その題名のごとく、読者はIからXの“窓”をとおして、医学、とくに眼科の歴史の風景を楽しめる。隣りあった“家”からは同じ対象が違った角度から望めるし、反対側の“窓”からはまったく別の景色も見える、といった具合だ。

一〇章のうち、六章にその名が出てくることからわかるように、シーボルトは本書の中で大きく扱われている。なかでも「日本散瞳薬伝来史」、「日本眼科学史上のシーボルト」、「中渡書(判決文)」からみたシーボルト事件の再検討」の各章では、さまざま

な資料が提示され、それをたくみに読みこんで真実を推理される福島先生の探究意欲が伝わり、大変興味深い。日本の近代医学の発展に大きな役割を担ったシーボルトという人物と、彼の周辺にいた土生支碩、高良齋といった人たちの実像に迫って、わが国の近代黎明期の医学を考えてみるのも意義のあることであろう。また、現在も眼科手術のなかで多数を占める白内障手術についても詳しい歴史が語られている。古代インドに始まった手術療法が世界の各地でどのように変遷したか、医家でなくともおもしろく読める。そのほか、世界各国発行の切手を掲げながら近代眼科学の成立過程を解説した「切手にみる眼科学のあゆみ」、日本の眼科諸流派を代表する馬嶋流眼科の成立過程とその内容を詳述した「馬嶋流眼科について」、「わが国における淋菌性結膜炎、所謂“風眼”の歴史について」、「日本眼鏡小史」、阿波の医師たちについて述べた「人とその業績」や、内外の眼科に関する題材で書かれた「日曜だけの歴史家、随筆家」の各章が満載され、どこからでも気楽に楽しく読むことができる。

本書の中で福島先生は「私達科学徒は、歴史を研究せねばならないが、徒らに唯、感歎したり、感謝して居る許りでは勿論いけない。ただし専門科学を建設した先学の血の滲む様な努力の跡―闘病の歴史を識らず又識ろうともしない学徒は、恰も親を知らぬ孤児の如く、その抱く世界観は小さく、且つ、その人生は淋しいであろう」と述べられている。読者はこの警句にあつて、あらためて歴史を学ぶ大切さを考えさせられる。が、そんな時、本書のような気軽に読める立派な歴史書があれば必ずや勇気づけられる

にちがいない。

(斎藤 仁男)

『眼科学史の窓』出版会 昭和六十二年十月

B 五判 一九四頁 定価五、〇〇〇円)

購入希望者は著者あて代金を添えて申込む。

神倅先生顕彰会編『神倅先生顕彰記念誌』

— 東京大学医学部精神医学教室開講百年に因んで —

本記念誌は一八八六年(明治十九)、東京大学医学部(当時の名称では東京帝国大学医科大学)において、同年十月ドイツ留学から帰朝した神倅が同年十二月三日に専任教授(つまり東大医学部精神医学教室初代教授)として精神病学の講義を開始したのを記念し、神倅の業績を偲んで編纂されたものである。東京大学の内外からこの顕彰会に参集した二五五名の会員を代表する原田憲一氏の「まえがき」に続く本書の内容は七部に分かれている。まず第一部「神倅先生論文復刻」の章では、神がベルリン留学中に我が国精神医療の状況をドイツ語で紹介した論文(一八八六、吉岡真二訳)を始め、「癲狂人取扱法」(一八八七)、「癲狂院設立ノ必要ヲ論ス」(一八九四)、「インフルエンザ病ニ統発スル精神病ノ実験」(一八九二)、ベルツの論考(一八八五)などにみるごとく当時の日本精神医学のトピックスの一つであった「狐憑病に就いて」(一八九三)、世界的に脳器質性精神病のプロトタイプとみ

なされ解明されつつあった「進行性麻痺狂ノ原因」(一八九六)、「麻痺狂ト梅毒トノ関係」(一八九六)などの主著の他、ベルリン大学で師事した「カール・ウェストフアル伝」(一八九〇)、および当時世を騒がせた相馬事件の旧相馬藩主誠胤の精神鑑定書(一八八七)が収録されている。

第二部では、一九三九年に東京大学精神病学教室開講五〇周年を記念した内村祐之の特別講演「神倅先生と東京帝国大学医学部精神病学教室の創設」が『精神神経学雑誌』(一九四〇)から復刻されているが、これは当時発見された神倅の日記の一部をも収録しており、従来一九八六年十一月三日とされていた神の開講日が同年十二月三日であることを初めて明らかにした貴重な資料である。第三部はこの開講日を、正橋剛二氏が金沢大学図書館で発見した神の講義の筆記録にもとづいて再確認した岡田靖雄氏が今回執筆した包括的な「神倅先生伝」であり、神家系図が付されている。

第四部はこの顕彰事業を記念した講演会(一九八六年十二月七日か?)の記録で、原田憲一氏の「神倅先生と進行麻痺研究」、小関恒雄氏の「神倅先生の修学時代」(神の東大医学部在学当時の講義時間表、同級生らの去就、医学部の建築図を付す)、酒井シヅ氏の「神倅先生の時代の医学—日本の医学の近代化」、西丸四方氏の「神倅先生御滞独の頃のドイツ精神医学事情」よりなる。また第五部は、この講演会終了後に神田学士会館でもたれた顕彰会会員懇親会におけるスピーチ(上述の神倅日記を発見した正橋剛二、神倅とほぼ同じ時期に渡独した森鷗外の研究者である

長谷川泉の他、山中学、懸田克躬、土居健郎、島園安雄、西村健、親族代表の小関弘子の各氏)を始め、一九八六年十二月七日に東京・染井靈園で行われた榊俣の墓前祭における挨拶(岡田靖雄、西丸四方、加藤伸勝、森温理の各氏、および親族代表の島村弥太雄氏)、並びに同日東京大学精神医学教室で催された記念展示会の展示品目録が収録されている。巻末には「東京大学医学部精神医学教室略年表稿(岡田靖雄氏)、会員名簿、「あとがき」(西山詮氏)が置かれている。

このように本書は、榊俣の業績や東大精神医学教室の歴史にとどまらず、日本精神医学の創生期やドイツ精神医学との関係、さらには明治初期の医学教育、留学事情などさまざまな視点からきわめて貴重な資料とすることができよう。

(濱中 淑彦)

〔榊俣先生顕彰会(代表 原田 憲一)〕

昭和六十二年十一月十五日

B 四判 総頁三一〇頁)

顕彰会々員以外の購入希望者には、残部を頒価八、〇〇〇円で分けている。

山口県医師会編『防長医家遺墨集』

山口県医師会は明治十二年十二月八日に開催された第一回山口県医学会大集会の日を創立の日と定めており、昭和六十三年をもつ

て百周年を迎えた。同医師会ではその記念事業の一環として、同年十一月二十八日より十二月九日、少口県立博物館において、同博物館の協催のもとに「防長医家遺墨展」と称する展覧会を行った。ここに紹介する『防長医家遺墨集』は、その展示品の解説書として作製された図録である。

本書に収録された人物は、慶応四年(明治元年)以前に生まれ、防長両国に関係した医家一〇〇人で、その遺墨を写真版で掲載し、懇切な解説を付している。解説・編集は『防長医学史』の名著でつとに知られる本会の田中助一評議員と、山口博物館の石原啓司副館長とが担当したという。

内容は五部に分かれ、第一の掛軸の部には五九名、第二の額の部には二名、第三の短冊の部には八名、第四の書簡の部には一八名、第五の原稿その他の部には一六名の遺墨が掲載されている。

取載人物のうちには、たとえば戴曼公・滝鶴台・栗山孝庵・永富独嘯庵・岑少翁・池田瑞仙・賀屋恭安・坪井信道・青木周弼・青木研蔵・大村益次郎・岡研介ほか、日本医学史上著名な人物も多いが、その遺墨は評者には初めて目にするものばかりである。評者も実は山口県人であるが、一方ではこんな先哲が郷土の医学史に関係していたのかとおおいに教えられ、改めて防長の医学文化の高さを認識したものである。

これら先哲の遺墨はいずれ劣らぬ個性豊かな筆致で揮毫されているが、くずし字に不得手な評者などには難読のものも少くない。その点、すべてに釈文(翻字)が付されるという配慮がなされているから、ありがたい。

図版の出来も申し分なく、何度繙いても楽しい。A四の大判、かつ厚手の紙面から溢れんばかりの鮮明な図版は、原物を彷彿させるに充分である。

本書は非売品として山口県医師会々員に配布されたものであるが、残部については山口県医師会事務局(〒壹三 山口市湯田温泉三丁目二番三三号)宛に直接申し込めば、実費わずか二、五〇〇円(送料込)で頒布してくれるというから、まことに良心的である。

本書には山口県の近世医学史が集約されている。そればかりではなく、日本全体の医学史料としても見逃せないものである。山口県医師会々員の方々のみの所蔵に終ってしまつては惜しいといえ、いささか語弊はあるが、ともかく日本医学史に興味をもたれる方々に広く入手をお薦めしたい。

(小曾戸 洋)

〔山口県医師会 一九八七年 一七四頁 非売品〕